

みんなのかんきょう

第22号 平成12年4月発行



【主な内容】

/// ふるさとの環境自慢 ///
福井市高尾町「亭(ちん)の水」/// インタビュー ///
「河川環境を守る」木幡雅好さん/// ★特 集 ///
子供たちの見たふくいの環境/// トピックス ///
ふくい環境シンポジウム開催される表紙写真「春の入口」(三国町雄島)
(撮影/坪内 彰)●ふるさとの環境自慢
「亭(ちん)の水」(福井市高尾町)

福井市内から国道158号線を大野市方面へと進む。天神の交差点の坂を越えるとすぐに「亭の水」の案内看板が目に入る。

その交差点を左に曲がり、緩やかな坂道にそって続く、真新しくきれいな住宅が整然と並ぶ新興住宅地を抜けると、すぐに道路の傾斜がきつくなり、昔ながらの高尾の集落へと入る。

坂を登り、集落の最奥部へと進むと、右手に車1台が通れるほどの林道が現れる。

『亭の水まで300メートル』という表示に、天気がいいこともあり、車を林道の入口に止めて歩いてみることにする。

舗装をしていない道は雪解けでぬかるみ、日当たりの悪いところには、まだ冬の名残の雪が解けずに残っている。

ぬかるみに足をとられないよう気をつけながら、つづら折りの坂道を登って行くと、徐々に沢を流れる水音が大きくなってきて、やがて、右手に亭の水の由来を解説した看板が登場する。

看板から少し奥まった岩肌を勢いよく流れ落ちているのが亭の水だ。

天文元年(1532年)に、明(中国)で医学を学んだ谷野一柏が朝倉氏を頼って高尾に移り住み、眼病に専念した。その際に常に配剤に用いた霊泉が亭の水だという。

そのため、亭の水は今でも眼病に効くといわれる。

花粉が飛び散るこの季節、思わず目を洗いたくなるのをこらえながら、ひしゃくで水をすくってみて、その流れる勢いの強さに驚く。腕に力を入れていないと、水の勢いにひしゃくを落としそうになってしまうのだ。

口に含んでみると柔らかい味がして、季節がら、雪解け水が混じっていると思うのだが、意外なほどに冷たくはない。胃腸にも効くらしいので、もう一口飲んでみた。

亭の水から、道なりに少し奥へと進むと薬師神社。薬師如来像は県文化財の指定を受けている名作だそう。

薬師神社参道の入口にも溪流が流れていて、山から湧き出てくる水の力強い音が絶えず続いている。

冬から春へと季節の移り変わりを実感させるような陽光が、杉木立の陰を地面の上にくっきりと浮かび上がらせる。

空も、見上げるだけで押しつぶされそうな鈍色の重い空ではなく、気分まで明るくなるような青い色をしている。

そんな空の色に誘われて、帰りは来た道とは別の、車の通れない徒歩専用の道を降りて行った。

下るには少し急な傾斜に、足元を取られないよう気をつけながら、ゆっくりと登り口まで降りて行った。

登って行くときには気がつかなかったが、「熊が出没します」との看板。

陽気に誘われて山を降りてきた熊はいなかったようだが、散策の際には、くれぐれも御用心を。



★ ふるさとの環境自慢募集中！！★

皆さんの故郷自慢で1ページを飾りませんか。

1000字程度の原稿に地図・写真を添付して応募してください。場所の紹介だけでも結構です。採用された方には記念品をお送りします。

●インタビュー このひと

河川環境を守る

ドラゴンリバー交流会事務局長
木幡雅好 さん

経歴

1935年生まれ。

北陸電力(株)で水力発電所の設計業務に従事した後、1961年より福井市役所に勤務。開発部次長、都市計画部長を歴任し、1995年市役所を退職後、現職。

Q. 河川環境保全活動に取り組むようになったきっかけを教えてください。

若い頃は北陸電力で水力発電に携わる仕事をしていました。発電の主力が水力から火力へと移っていったことをきっかけに会社を退職し、福井市役所に入りました。市役所では土木行政にずっと携わってきましたが、中でも河川部局には12年間おり、主に治水行政に携わりました。若いときは山から流れ出る一滴の水も無駄なく発電にまわす、また土木行政へ移ってからは、水害をなくすということだけに一生懸命になっていたが本当にそれ

であったのかという反省がありました。また、市役所を退職したときがちょうどドラゴンリバーの立ち上げのときで、設立に関わっていたこともあって、ドラゴンリバー交流会で活動するようになりました。

Q. ドラゴンリバー交流会設立の経緯を教えてください。

ドラゴンリバー交流会は、「ドラゴン・プロジェクト」のモデルケースとして始まりました。「ドラゴン・プロジェクト」というのは、ひとつの川を一匹の竜に見立てて、その川の流域をひとつの単位とした運命共同体としてとらえ、竜としての川を元気にしていくことが流域を活性化し、自然と共存しながら豊かな生活を営むことができるという発想です。ドラゴンリバー交流会自体は平成六年から準備をはじめ、平成7年に正式に設立されました。今年で5年になります。

Q. 具体的にはどういった活動をされているのでしょうか。

河川周辺の美化活動はもちろんですが、それだけにとどまらず、河川の水源である山にどんぐりの苗木を植えたりする活動を行っています。また、シンポジウムを開催したり、水環境を守るための様々な取組みを通じて、水環境に関心を持ってもらえるよう活動しています。そして、そうした活動を通じて人づくりをしていきたいと考えています。何年かかるかわからないし、もしかしら途中で立ち消えになってしまうかもしれませんが、しかし、ドラゴンリバー交流会が河川の清掃活動を呼びかけると、500人も人が集まってくれるんです。行政が声をかけた場合には、住民側に税金を払っているんだから行政が勝手にやればいいという意識がどうしてもでてきてしまうことがありますね。ところが、ドラゴンリバーのような民間の団体が声をかけると、いろんな人たちが集まってきてくれる。ドラゴンリバー交流会が呼びかけ、住民がそれに応えて参加し、行政は集めたゴミの回収や処分を引き受けるといように、住民・行政・私たちのような団体が手をつないでいく、「協働」つまり協力して働くというシステムが、設立から5年かかってやっとできあがってきました。河川の掃除では川の中のゴミをカヌーで回収してくれる人たちもいるんですよ。

Q. ドラゴンリバー交流会の活動範囲を教えてください。

「ドラゴンリバー交流会」の名前のおり九頭竜川本流はもちろんのこと、日野川や足羽川など九頭竜川水系の支流でも活動しています。

Q. 今後の交流会の活動について教えてください。

川や海の問題というのは、水源となる山の状況と密接な関係があります。いま全国で、45団体ぐらいになると思うのですが、漁業団体が呼びかけて、水源となる山の森づくりをやっていますが、福井ではまだそこまでいっていません。そういう意識はまだ低いですね。こういうことにどうやって気付いてもらって、行動を展開できるかが、今後のドラゴンリバー交流会の課題のひとつでもあると思います。

Q. こうした活動を通して何か感じたことはありますか。

最近、うれしいと思ったのは、子どもたちが自分の住んでいる地域の川に関心を持ってきていることです。荒川ではもう10数年も前から福井市の旭地区の子供会を中心にして水質の調査をしていますが、そうした水環境を考える子どもたちの活動が下流から上流の松岡町へと広がって、今では双方の子供会で荒川サミットを開くまでになりました。こうした動きが、先日、荒川の環境基準が2ランク上がったことにつながっているのだと思います。このような子どもたちの活動は、荒川だけでなくほかの地域にもどんどん広がっていています。21世紀を担っていく子どもたちが、水は命の源であるということに目を向け始めたことに大きな希望を抱いています。

●特集 子どもたちの見たふくいの環境

地球の温暖化、 ごみや都市河川の汚れ。 子どもたちはこうした問題を どう見ているのだろうか

さる1月22日(日)、福井県国際交流会館において、地域環境ジュニアパトロールの活動報告会が開かれた。

これは、夏休みを中心に小・中学生が、身のまわりの川や海、湖、大気、自然、ゴミ、地域の様子などの中からテーマを選び、調査するもの。そして、気付いたこと、思ったこと、考えたことなどを、話し合いながらレポートとしてまとめ、発表した。

平成3年度から始めており、これまでに、169グループ、延べ1363人が参加している。

9回目の今年は21グループ、144人が活動した。

以下、いくつかの発表を紹介する。



◆野鳥の観察

バードウォッチャーズ(福井市宝永小)のメンバーは、昨年に続き2回目の参加。

去年の報告会で、ツバメの巣の数を調査したとの発表を聞き、自分達も鳥をテーマにしたいと考えた。そして、宝永地区やそのまわりにはどんな鳥がいるか、また、地域の環境はどうかを調べることにした。

街路樹にいるすずめの調査、インターネットでの「身近な野鳥で環境診断」の検索、そして、足羽山や宝永地区でのバードウォッチング。福井駅前で跳んでくるすずめを数えると、約千九百四十羽。人のいるところでしか生きられないすずめは、多くの人が行き来するところに集まってくる。こうした場所にはカラスが近寄らないので、安全な場所として集団で移動すると考えられ、東京などの都市によく見られる。

都会に見られる現象が福井にも見られるということは、福井でも水田などが減って、すずめにとって住みにくい環境になりつつあるのではないかと考えた。

しかし、その後のインターネットの環境診断では、足羽山が人が健康な生活を営むのにふさわしい環境であるランクA。その他、清水町、敦賀市もともにランクAであった。

結果に満足しつつ、いよいよバードウォッチングにチャレンジ。

足羽山ではコゲラ、メジロ等を見つけ、キジバト、シジュウカラ、イカル、ムクドリ等の声を聞いた。宝永地区では、ムクドリ等を見つけた。鳥を呼ぶために巣箱を作り、スズメやシジュウカラが来てくれることを楽しみにしている。

◆ごみとダイオキシン

かがやけ口名田ジュニア隊(小浜市口名田小)は、地区の人たちのごみ処理の様子と、ダイオキシンに対する意識を調べた。昨年のクリーン作戦でごみがたくさんあったことや、地区内にクリーンセンターができることなどからテーマを決めた。

町内でアンケートしたり、インターネットでダイオキシンについて調べたり、市役所でのインタビュー。メンバー3人という少ないグループながら、積極的に活動した。

アンケートの結果、缶の分別やペットボトルのリング・ラベルはずしについて、二つの町内で違いがみられた。缶の回収による収入で福祉活動を行っていることもあるが、クリーンセンターができる予定の町内の人の方が、分別等に対する意識が高かった。また、ダイオキシンについてはほとんどの人が関心を持っていた。

ダイオキシンについては、環境庁の基準で1日に体重1キログラムにつき4ピコグラム以上は取らない方がよいとされている。1ピコグラムとは、東京ドーム一杯に水を入れ、この中に角砂糖を溶かしたくらいの濃度。ダイオキシンは体内に入ると、いくらかは便と一緒に排出されるが、残ったダイオキシンは血液の中を流れ、ガンを発生させたりする、恐ろしいものなんだと感じた。

市役所ではクリーンセンターの話の伺い、有害なガスや良くないものを取り除く装置が付けられることがわかった。そして、市役所の人みんなの身の回りのことをいろいろ考えていることを知った。

今後、他の人にもごみの分別やきまりに協力するよう呼びかけたい、と決意を述べた。

◆樹木を見る

グリーンレスキュー隊(盲学校)は、学校の敷地内の樹木と、庭について調査した。自然豊かな学校の周りを調べることによって、自然とは何か考えてみようと思ったからだ。

学校内には我慢できる木がたくさんある。あちこちで見られるシラカバは、寒い場所で育ち、福井県が南限である。日当たりのよいやせた土地に育ち、風や公害・害虫に弱い。環境汚染を測る木として見ることもできる。昔は薪材に使われたし、パルプの原料にもなる。花粉は豚の鼻みたいな形。今までただの木だったものから、様々な発見があった。

校舎の角には大きなメタセコイヤ。生きた化石と呼ばれ、石炭の原木でもある。50年前に中国で発見されるまでは化石でしか知られていなかった。たくさん落ちていたドングリは、ドングリ銀行に送った。ドングリを集めてポイントを貯めると苗木が送られてくる。ドングリの種類によってポイントが違うことに驚いた。来年も継続したいと考えている。

盲学校内には名前の付いた庭がある。ノースロップの森は木が多く、森のようになっている。森の中には孵化したばかりの卵の殻が落ちていた。鳥が安心して子育てできる環境であることをうれしく思った。中庭は広くてコケがたくさんある。キンモクセイ、ゲッケイジュなどいい香りのする木が植えられているのは、匂いの花木園。前庭には、トロの木と呼んでいる大きな木がある。幼稚部の中庭には、サクラとアンズの木もあった。

いつも何気なく見ていた学校の周りには、すばらしい自然があった。環境を調べるにはいろいろな方法があることも知った。そして、私たちには植物が必要だと改めて感じた。

◆川の環境と水質

狐川をきれいにするための活動がしたい、と立ち上がったのは西っ子あいアイ2(福井市社西小)のメンバー。学校の総合学習の時間に狐川を探検し、川の汚れを実感した。

まず、狐川について調べ、人々の狐川に対する意識をアンケート調査した。川をきれいにする方法を調べるとともに、ごみ拾いも行なった。狐川は奈良時代からこう呼ばれている。昭和20年頃から住宅が増え、生活排水が流れ込むようになり、水が汚れ、昭和62年にはユスリカが大発生した。ユスリカはヘドロのある汚い川に住む昆虫である。

アンケートの結果、水を汚さないために実行していることは、排水溝に網をおく、あまり洗剤を使わない、料理をたくさん作りすぎない、など。しかし、これでは狐川が汚れるはずだと思った。狐川をきれいにするために何ができるかを調べた結果、米のとぎ汁は植物にやる、フライパンの油は紙や古いTシャツを切ったものでふき取るなど、たくさん方法が出てきた。メンバーは家の人と話し合い、実践してみたが、やってみると途切れてしまい、継続は難しい。それでも、一つ二つでも続けていくよう約束しあった。

狐川にごみ拾いに行くと、二週間前のごみを拾ったばかりなのに、またごみがいっぱいあった。掃除をするだけでは根本的解決にならない。

ジュニアバトロール活動の後も狐川をきれいにしたいとの願いから、クラスや学校、地域の人々にも狐川の現状を知らせ、きれいにするための取組みを呼びかけている。

狐川の調査を進めていくうちに、狐川だけでなく、環境全体にも目を向けるようになり、地域の方や市役所の方に、地域の環境をよくするための提案を行っている。

◆ナホトカ号事故のその後

国見環境調査隊(福井市国見中)は受験を控えた中学三年生で、報告会にはビデオレターで参加。

平成9年の重油流出事故で被害を受けた国見地区。地元の方やボランティアのおかげで、国見の海岸はきれいになった。しかし、本当に重油はなくなったのだろうか。重油の残っている場所と地区の人々の重油に対する意識が報告された。

海岸の岩、ガソリンスタンドの前、学校の前、漁港の堤防など、海への影響はないが、まだ重油が点在していた。これは回収時にこぼれた重油だと考えられる。

事故では海の生物、魚や貝類、鳥などに影響が現れ、減少しているものもあるが、人々の意識は薄れ、忘れ去られようとしている。

海水浴場もきれいになり、事故のうわさも消えている。重油の影響がないのはうれしいが、調べた時に見られたたくさんのごみの方が問題だと指摘もあった。

国見環境調査隊のメンバーも連続の参加で、二年間の活動を通じて、自分たちの住む国見地区の素晴らしさを感じ、ますます好きになった、と述べている。

ここでは紹介できなかったが、大気調査、リサイクルなど、さまざまな活動が報告された。

こうした活動を通じて、子ども達は身近な環境に愛着を持ち、今までは違った視点で身の回りの環境を見つめるようになっていく。きれいだと思っていた川が意外と汚れていたり、きちんと分別されていると思っていたゴミがいろいろ加減だったり、逆に学校の周りには豊かな自然があることに驚いたりするなど、新しい気付きや発見がたくさんあった。

川や湖が汚れたり自然が壊れる原因は、自分たちの生活にあることも知った。そして、素晴らしい自然を守り、汚れた川や湖をきれいにするためにどうしたらよいかを考え、実践していくようとしている。

こうした子どもたちは大人の環境意識に疑問を持ちはじめていく。今こそ、子どもたちの取組みと願いを大人たちが真剣に受け止め、そして、行動していくことが求められている。

●ふくい環境シンポジウム

「自然との共生をはかる地域づくり」開催される

開発の進展や外来種の急激な増加等により従来の生態系が破壊されようとしているなか、自然環境を保護し、自然と共生した地域づくりを目的として、環境ふくい推進協議会と福井県共催の「ふくい環境シンポジウム」が、3月29日(水)鯖江市嚮陽会館で開催され、約160名が参加しました。

最初の基調講演では、(株)生態計画研究所所長小河原孝生氏に「自然との共生をはかる地域づくり」の演題で、御講演いただきました。

まず最初に、自然環境を観光資源に活用して地域づくりを進める新潟県高柳町の事例や、ワークショップ形式で「丸池の里」整備を進めた東京都三鷹市の事例などをスライドで紹介し、住民参加による合意形成の必要性を説明されました。また、地球温暖化などの環境問題を解決し、持続可能な社会を形成する上で、環境学習の重要性をOHPを使って、分かりやすく説明していただきました。この中で先生は「豊かな感性と創造力を育てていくことが、自然と共生する地域づくりの本質的な部分である」と訴えられました。

基調講演終了後、「リサイクル」(コーディネーター:山内フミ子福井県連合婦人会会長)、「環境学習」(コーディネーター:小河原孝生氏)、「環境美化活動」(コーディネーター:伴岩男福井を美しくする会連絡協議会会長)の三つのテーマで交流会が開催され、総勢約80名が参加しました。

各交流会では、それぞれの活動内容や活動を進めるうえで苦労していること、悩んでいることなどについて、意見交換が行われました。

参加者からは、コーディネーターにアドバイスを求めたり、参加者間でそれぞれの活動に対して、質疑応答がされたり、終始、活発な議論が交わされました。

●読者の窓

● 私たちはCO2を放置せず、減らす行動計画に参加しなければならないと思いました。(福井市 無職 男)

● 物資がない時代から、金さえ出せば便利で快適な暮らしができる現代社会になった。反面、環境の破壊は日本だけにとどまらず近隣諸国までに及んでいる。今こそ地球規模で生活の見直し(考え方を含めて)をしなければならないときである。(大野市 嘱託職員 男)

- 特集「環境にやさしい暮らしを考える」を読み、これから(今日)自分のできることから一つずつやっつけていこうと思った。(福井市 会社員 男)
- 仕事柄、環境問題に大変関心があります。地球環境、特に大気や水に関して心配事ばかりです。子供の頃遊んだ川が大変汚れているのには心を痛めています。(坂井町 会社員 男)
- 特集「環境にやさしい暮らしを考える」では、実例を上げて節約の方法を言っているが、少し中途半端な取り上げ方のように感じた。(福井市 会社員 女)
- エンゼルランドで「おもしろそうな小冊子があるな」と目にとまり、持ち帰り家で見させてもらいました。特集を読んで、『自分も電気のむだ使いをしまつてるなあ』と反省してしまいました。(福井市 主婦 女)

ごみダイエット会員募集

県では、豊かで美しいふくい環境を守り、
「ごみ減量化・リサイクル日本一」を目指す仲間「ごみダイエット会員」
を募集しています。



- ◆募集期間 平成12年4月10日(月)～5月20日(土)
- ◆対象者 県内に居住する方で、ごみを含む環境問題に関心を持ち、ごみの減量化やリサイクルに積極的に取り組む方
- ◆募集人員 25,000人
- ◆応募方法 応募用紙または県ホームページ内の応募ページに必要事項を記入し、廃棄物対策課に郵送、FAXするか健康福祉センターまたは福井県登録リサイクル推進店内の応募箱に投函してください。
- ◆会員特典 会員証や会報を送付します。
- ◆その他 詳しくは、応募用紙中の募集要項をご覧ください。または、廃棄物対策課までお問い合わせください。

●問い合わせ・送付先
〒910-8580 福井市大手3丁目17-1
福井県廃棄物対策課「家庭ごみダイエット事業係」
TEL 0776-20-0317(直通) FAX 0776-20-0679
ホームページアドレス <http://info.pref.fukui.jp/haitai/index.html>

アースサポーターを募集します

県では、地域の人たちへ地球温暖化に関する情報を提供したり、
日常生活において地球温暖化を防止するための実践活動を行って
いただく「アースサポーター」(地球温暖化防止活動推進員)を募集します。

- ◆募集期間 平成12年5月1日(月)～5月31日(水)
- ◆応募要件 年齢18歳以上の県内在住の方で、地球温暖化防止への意欲と行動力のある方
- ◆募集人員 100人
- ◆任 期 2年間
- ◆応募方法 「アースサポーター応募用紙」に必要事項を記入し、県環境政策課または市町村環境担当課へ郵送、FAXもしくは持参するか、みどりネット内の応募ページに必要事項を記入し、送信してください。
- ◆その他 詳しくは、「アースサポーター応募用紙」またはみどりネットをご覧ください。県環境政策課までお問い合わせください。
- ◆問合せ・申込み先
〒910-8580 福井市大手3丁目17-1
福井県環境政策課 TEL 0776-20-0303 FAX 0776-20-0634

または市町村環境担当課
みどりネットアドレス <http://www.erc.pref.fukui.jp/>